

## 物言わぬ神の意思に言葉を

一九八八年 七月 没

芹沢光治良

僕は第一次世界大戦後、戦敗国ドイツは勿論、戦勝国フランスも、大戦の不幸から立ちあがれない頃、結婚したばかりの妻と、フランスに留学した。フランスの貨幣価値が下落して、日本の一円が百円にも、千円にも使えたので、豊かな留学生生活ができた。たゞ意外のことに、パリ市民でも、日本を知らず、シナの一部分か、などとされた。大震災のあった東京の国だと答えると、ふうんと納得したような顔をした。

僕は三十歳前で、知識慾も旺盛で、ソルボンヌ大学のシミアン教授の研究室で、三年間、デュルケム学深の実証的経済学——特に、貨幣論を勉強して、博士論文も提出し、論文が印刷されるのを待って、日本に帰ることにしていた。その三年間、フランスの文化——文学、音楽、演劇等に魅せられて、各分野の人々にも親しくなり、留学の三年間を、五年間分にも充実させたと、フランスの親友にほめられた。

その頃、新聞の一隅に、「日本では、大正皇帝が死去し、若い皇

太子が即位して年号を昭和と改めた」という記事があった。それが、僕が昭和を知った最初である。当時、ラジオというものが発明された噂を聞いたが、パリ人はラジオを信じなかったから、あの新聞の二行の記事を見落したら、僕は昭和を知らずにすんだかも知れない。

というのは、いざ帰国の支度をすませた時、肺結核で倒れた。当時、結核は治療法のない難病で、肺結核の診断は、死の宣告に等しかった。実際、それまでの僕は、その時死んだのだから——

それが、産れかわって、新しい僕が、まるで靈魂が故国へもどるようにして、フランス船で神戸に上陸したのが、昭和四年末の小雨の降る朝だった。それから、現在の「僕の昭和」がはじまった。それまで、パリを去って日本に帰るまでの、昭和の二年半ばかりを、一体、何処ですごしたか。

恩師シミアン教授が、医科大学のブザンソン教授に相談した結果、高原療養都市、オートヴィルに送って、Y博士の自然療法を受

ける以外に生きる道はなしとして、淋しい高原に送られた。これは戦争中胸をやられた将兵を収容するために、フランス政府がつくった高原療養所だった。Y博士の自然療法というのは、医薬をはなれて、各自の生命力によって病軀をなおすというように、自然の力をたよった二種の修行で、実に死から生きかえる難行苦行だった。博士は日本のゼンのようだと聞いたが、独りでは耐えられないからとて、僕を三人の療養者の仲間に加えてくれた。一人は天才だと言われた若い天文学者のジャック、他は大学を出たばかりのジャンとモリス。この三人の若い知識人と、二年近く生活をともにして、フランス人の精神を新しく識り、多く教えられて、これこそ僕の留学だったと、目のさめる想いであった。

特に、生活上は実証精神に徹底している彼等の精神に、見えない神が存在しているのに驚いた。その神を、天才ジャックは、宇宙を動かしている唯一の偉大な力だと、説いた。人間は各自、その偉大な力に命ぜられた任務を、この世で果さなければならぬが、そのことに気付かなかったのを、神の慈悲から結核で知らされて、喜んで任務を果すからと、誓って精進したおかげで、間もなく社会復帰

のできるまでになったし、若い二人の同志も同様であるが、僕に対しては、偉大な力は、好きな文学をする使命を与えているようだから、社会経済学などやめて、喜んで文学をしようと、神へ誓えど、熱心に説いた。それは共同生活を始めて、一年以上たってからだか……。文学は物言わぬ神の意思に、言葉を与えるような、貴い任務だからと説いて、僕が決心さえすれば、四人そろって、魔の高原を脱出できるからと……しばしば話した。

将来このように療養生活をつづけなければならぬのなら、面倒な実証経済学などやめて、好きな文学をするよりないと、僕も考えた。

一九二九年の復活祭前日、Y博士は同志三人に社会復帰を許して、僕にも、思いがけなく、日本へ帰る許可をした。その時、三人の同志は歓声をあげたが、Y博士は僕の帰国に条件をつけた。

——海気を怖れるため、設備のいいフランス船を選ぶこと。帰国して十年間、午後二時間の絶対安静療法を実行すること。夏二カ月間、海からはなれた千メートル以上の高原で過すこと。

## 旅廻り・宇野重吉一座



編集—藤秋社 執筆—木下順二・尾崎宏次  
協力—劇団民権 撮影—しやっせただお・吉本雅彦他  
織をなびかせ全国一一六か所を旅公演したウイ  
ウッドな記録を豊富な写真を交えて公開。  
(付・宇野重吉年譜)  
定価一九〇〇円  
6月28日発売予定 四六他刊・二四頁・モノクロカラー印刷

## 日本・アジア音楽へのはじめての開拓的集成—— 岩波日本の音楽・アジアの音楽

【編集】 彌生郷昭・柴田南雄・徳丸吉彦  
【委員】 平野健次・山口修・横道萬里雄  
A5判上製函入・平均三三四頁(別巻特別付録・CD二枚)  
【全7巻】  
【別巻2】  
第一回 成立と展開 定価四一〇〇円  
第二回  
【予約募集】申込締切——9月15日 内容見本、送呈



岩波書店  
東京千代田一ツ橋  
電話 東京 6-26240

僕は昭和四年の末に、神戸港に上陸した。港に出迎えた家族や親しい人々は、僕が病んでいないことに喜んで安心したが、かつて神戸で見送った僕でないことには、気付かなかつた。神戸で列車に乗る時、駅の売店で買った総合雑誌「改造」に、懸賞小説の募集記事があった。百枚前後の小説で、締切りまで十日もなかつた。それを見た時、僕は天才ジャックの説いた偉大な力（神）の僕に対する意思など、感じた。応募原稿を書くことは、その神に対する義務であり、その結果によって、僕の才能が神の期待にこたえられるか、自ら判断できると、覚悟した。そして、締切りまでに、療養しながら九十五枚書いて、「ブルジョア」と題して郵送した。それが、昭和五年の五月号に、一等に当選して、賞金千五百円を受けた。

当時、日本は不景気のどん底のようだった。何処でも現金収入がなくて、名古屋の私鉄の社長をしていた義父の会社が、乗客が必ず切符代を払うから、日銭が入るとて羨望されていた。その義父が仕事の手をひろげて、東京へよく出張するので、東京に控家の洋館をたてて、僕達夫婦が留守番をすることにした。義父は僕のために学者用の書齋を、洋館に用意してあったから、ゆっくり療養生活ができた。

その義父も、賞金の千五百円には、これが小説の代金かと、驚いたが、これは雑誌社の宣伝費だから、こんな賞金におだてられて、原稿など書くなど忠告して、文士が社会で軽蔑されていることをいろいろ説明した上で、療養に専心するよう注意した。

賞金から、僕は三百五十円で、軽井沢に近い星野温泉の丘に、今の山小屋を建てて、Y博士の条件を遵守することができたし、天才ジャックの神に、これが僕の使命だと示された以上、喜んで作品を書くことにした。当時の原稿料は一枚三十銭か五十銭で、発表する

雑誌も少なかつたので、純文学の作家は困難であつたらうが、十年間という長い期間、僕は作品を発表できた。文壇の実情も知らず、文学の世界に親しい者もなく、療養中のこととて文壇つきあひもしなかつたのに、よく十年間つづけられたものだ。不思議でならない。とにかく、僕はY博士の条件の十年間を守つたのだから、完全に健康な人間になつたことを、自ら確認したいと思つた。

その十年間に、日本では清州事変から日支事変になり、国政が軍の力で動かされて、国内は軍の美しい文句に酔つたように、戦時状態で、若者はお国のために勇んで出征していた。（僕の実弟、義弟三人も出征した）僕は日支事変の本質を知ろうと決意して、「改造」の特派員の名目で、中国へ赴いた。それによって、わが健康が確認できると思つたが、四カ月かけて北京を中心にして北支、内蒙古、濟南、青島をへて、上海、占領したばかりの南京を巡歴し、実証社会学者としての観察をした。出発した時、命令された通り、陸軍の参謀本部のA大佐に、観察した事実を正直に報告したところ、A大佐は厳命した。

「今の報告を、文章にしたら勿論、一寸でも喋つたら、この娯楽にはいられんからな。君は外国へ郵便を出しているようだが、やめろ——」

その時、僕は必ず大戦になるぞと悟つたが、とにかく最後まで生きる覚悟をした。それから、太平洋戦争になり、どんな風に敗戦を迎えたか、ここに書くのは辛いことだ。二十年の五月にB29の空襲で、わが家が焼けて、星野の丘の山小屋へ疎開していた家族に加わつたが、食糧の配給がなくて、「米の花」という雑木の白い花を採集し、乾して、白米の代用にしてお粥にし、山羊の食べる野草は食べられると野菜代りにして、飢えをしのいで、下痢ばかりしていた

が、よく死ななかつたものだ。

最後の勝利は我に在りと、軍のお題目に、空腹でうんざりしている時、八月十五日の正午、戦争終結の詔勅をラジオで聞いて、飢えながらも家族六人、生きおおせたと、秘かに万歳を唱えた。それからの暮しがまた大変だった。日支事変中にシナで見た、純朴な日本兵の多くが、怖るべき動物に化したように、銃後の人心も荒廃したが、それが敗戦後の混乱時に表面に現れた。戦争が終わったから開たとして、農家が米、野菜、卵などをひそかにわけて、疎開した荷物のなかから、和服の晴衣をみなさらっていった。そればかりか、東京へ引き上げて二年間、山の家へ来ない間に、星野事務所、家の硝子に一枚一枚、白インキで芹沢と書いてくれてあったから硝子は盗まれなかったが、家のなかの物はみな盗難にあった。数年後、麗の村の思いがけない家の軒下に、わが家で大切にしていたジュウタンが干してあるのを発見して、啞然としたものだ。

僕は二十一年一月、世田谷の三宿に、焼け残った陋屋を借りて、東京に移り住んだが、その時、財産も預金もなく無一文で、五人の家族を養うことになった。五十歳だった。

僕は役人の頃視察した農村の小作人になる決意をして、二階の四畳半にこもり、註文の原稿はすべて引き受けて、終日原稿用紙の升目をペンでたがやした。休む暇もなく服物を足にしない日がつづいたが、二年半ばかりして、栄養不良と過労のために、突然喘息と胃下垂で倒れて、それが生涯の宿痾になった。

こんなことを書いてもきりがない。最後に、僕の文学は、天才ジャックが言ったように、物言わぬ神の意思に言葉を与えることになった。その信念で一生書いたのだが、同時にその神を一生求めたものだ。しかし、神を確信できないで、八十八歳の時、衰弱の末、静かに死を待っていた。

その時、ジャックの説いた唯一の偉大な力、親神に会えたのだ。その神によって力を与えられて、全く若々しく健康になり、神の命令によって、創作をして、年一回書下し長篇小説を発表し、この七月には、三部作三冊目の『神の計画』が、新潮社から出版されるが、これから、神の世界の者との交渉から得たもの等、次々に書くつもりだ。従って、昭和が終わっても、立派に作家として生きる自信がある。

(せりぞわ・こうじろう 作家)



## 江戸博物図鑑●荒俣宏監修 高木春山『本草図説』

第一巻「植物」／発売中／定価3900円 ■江戸の図鑑「本草図説」一九五巻の中から荒俣宏が精選した二〇〇余点の植物、花や鳥や自然を捉える春山の目は、すでに科学者でありイラストレーターである。校註八坂安守。■続刊／②水産／③動物



リブレポート

東京都豊島区南池袋2-23-2  
電話 03-983-6191